

視覚障害をもった博物館実習生の受け入れ記録 ～誰もがいつでもどこでも学べる環境の充実をめざして～

福井 智之

1. はじめに

相模原市立博物館では、開館翌年の平成8年から博物館実習生を受け入れている。平成28年度は、歴史、民俗、生物、地質の4分野で行い、16名を受け入れた。応募があった学生の一人に、視覚障害を持った学生がいた。当館では、これまで障害を持った実習生を受け入れた経験が無く、どの分野の実習もフィールドワークを重視しており、受け入れるのは難しいかと考えた。しかし、今年度開館21年目を迎えた当館は、時代の変化とともに施設を改善し、様々な立場のお客様にも可能な限り不自由なく利用していただけるよう、施設の改善に努めてきたが、まだまだ課題もあるのが現実である。そこで、本学生の博物館実習を受け入れ、視覚に障害を持った実習生とともに当館の現状と今後の課題を見出す事ができればと考え、本実習を実施することとした。本稿ではその実習をまとめ記録に残していくものである。

2. 事前ガイダンス

博物館実習を実施するに当たり、実習生と対象に事前ガイダンスを行った。事前ガイダンスでは、博物館実習担当者より実習に向けての心構えと準備、実習生全員で取り組む共通実習についての説明を行った。その後、専門分野ごとに分かれ、日程の確認と大まかなカリキュラムについて説明した。ここでは、実習に向け博物館側の受け入れ内容や実習で追究したい課題、本人の要望について話し合った。

確認事項は以下の通りである。

- ・ 共通実習、専門実習ともに、他の実習生と同じカリキュラムで実施する。
- ・ 博物館側が危険と判断したり、本人が参加が難しいと感じたりした場合は、見学又は他の内容に振り替える。
- ・ 専門実習で追究する内容は、博物館の施設面における課題と、学習資料展の体験コーナーの作成とした。

3. 博物館実習の流れ

当館の博物館実習は、全実習生を対象に学芸員として

基礎的な知識や技能を身につける共通実習を3日間、各専門分野に分かれ担当学芸員の指導のもと実施する専門実習を6日間の計9日間で構成している。

共通実習では、当館の歴史や施設、機能等の解説、及び学芸員として必要な資質能力の習得を目的に、各種資料の取扱、実習生が個々に館内の展示物を1つ選び資料調査からシナリオ作成まで行う展示解説を実施している。また、専門実習では、専門分野の調査のもと展示を作成し、一般のお客様に向けた展示解説までを一つの枠組みとして実施している。また、市民協働の視点から各種ボランティア団体の活動への参加も行っている。本実習生の主なカリキュラムは表1～2の通りである。

表1 共通実習カリキュラム

1日目	ガイダンス 管理運営業務の概要 学芸業務の概要 バックヤード見学 天文・プラネタリウム業務の見学
2日目	パネル製作実習 人文系資料の取扱 自然系資料の取扱
3日目	展示解説実習 ・ 資料調査・シナリオ作成 ・ 展示解説

表2 専門実習カリキュラム

4日目	相模原市立博物館の施設や展示について視察
5日目	相模原市立博物館の施設や展示についての課題についてレポート作成
6日目	市民協働の実際 市民学芸員（博物館ボランティア）によるクイズラリーへの参加
7日目	学習資料展の趣旨の確認 体験コーナーの資料選定
8日目	体験コーナーの資料決定 解説文の作成及び推敲
9日目	全体的な展示の見直し

4、博物館実習の実際

①実習1日目（共通実習1日目）

実習生全員を対象に、博物館職員より施設の概要説明、館内見学、プラネタリウム業務の見学を行った。

【実習日誌より抜粋】

講義を聞いていて、この博物館がいかに地域との関係が強いかを知ることができた。プラネタリウムで観賞した恐竜とオーロラの映画は、音だけでもとても楽しめた。本来映像で見せるものだと思うのだが、細かな効果音にもこだわられているようで聞いているだけで場面が想像できた。

②実習2日目（共通実習2日目）

実習生全員をA～Cの3グループに分け、人文系資料の取扱（図1）、自然系資料の取扱（図2）、パネル製作実習をローテーションで行った。資料の取扱では、植物資料のマウント作業や巻物の取扱について実習を行った。また、パネル製作実習では、本館で実施する「クイズラリー」の館内掲示用パネルを作成した。本実習生は視覚障害をもっていることから、危険がないよう他の実習生の協力も得て、危険がないよう十分な配慮と事前の説明を行った上で実施した。また、本実習生の希望によりボランティアのヘルパーが同行した。



図1 人文系資料の取扱



図2 自然系資料の取扱

【実習日誌より抜粋】

本日の実習では実際に手を動かし、自分の体をもって様々なことを体験した。その中で大きく感じたことは、目が見えなくてもできることと、やはり視力がないと厳しく自分一人では作業にならないことがあるということに気づくことができた。パネル製作時に感じたことだが、こうしてキャプション一つを作るだけでも練習や時間が必要であることに気づき、博物館が行う展示にはとても多くの労力が使われているのだと感じた。

③実習3日目（共通実習3日目）

館内展示物を使って、実習生相互に展示解説を行った。午前中、展示解説のシナリオ作成、午後は常設展示室を回って実習生一人ずつ展示解説を行った。実習生相互に意見を言い合ったり、博物館職員がアドバイスしたりした。また、本実習生の希望によりボランティアのヘルパーが同行した。（図3）



図3 展示解説の様子

【実習日誌より抜粋】

私は勝坂式土器を聞き手の学生さんの一人に触ってもらうという展示解説を試みた。その際、「目を使わないで鑑賞する」ということを前提にし、本人にもそして他の方にもできるだけ目をつぶってもらうように促してみた。代表の方には土器を触っての率直な感想を言葉にしてもらい、全員に聞こえるように意識したやりとりをいくつか行ったあと、その土器のことを相模原をポイントに入れつつ解説し、締めは「この土器がどんな風に使われていたのかを想像してみてください」と促した。解説後にいただいた感想では、初めてのスタイルでの物の鑑賞ということで新鮮に感じてもらったことが分かり、自分の中でのねらいは達成できたのではないと思う。これから機会があれば実際に目を普段から使わない人にも、このような展示解説を受けてもらえたらと思う。反省としては、もっと「想

像する」ということにフォーカスして、そのことに時間を使えたらなということだ。また、取り上げたのは土器の破片だったので、土器全体の大きさを提示したり、当時の祭事や占いの記録などを加えたりもして、より使い方の想像の要素になることを話せたらよかった。

④実習4日目（専門実習1日目）

実習4日目から専門実習となり、博物館職員と本実習生とで実習を行った。ユニバーサルデザインの視点から館内見学を行い、施設及び展示について実習生が感じた問題点を洗い出した。（図4、5）



図4 白杖棒を使用して展示室内を確認



図5 展示室内のバリエード等の安全性の確認

【実習日誌より抜粋】

一日かけて博物館内を巡回し、その前半は1対1で説明をしていただきながら展示や、設備について考えていった。その中から最終的には「学習」、「ユニバーサルデザイン」といった切り口からレポートを仕上げるようになった。本日の段階ではまず、見学を終えて率直な感想を述べ、入り口から順番にまとめていく作業を行った。たとえば展示物の周りに設置されているバリエード1つとっても種類があり、どのようなものが1番展示をしていく上で良いものなのか、障害者や子供が来館することを念頭におきながら考えたり、プラネタリウムの車いすスペースへの誘導について等、

指導してくださる職員の方と意見交換をした。今後これらを総合して一つのレポートにまとめていく。

⑤実習5日目（専門実習2日目）

前日に行った施設見学から実習生が感じた問題点についてレポートを作成した。

【実習生のレポートより抜粋】

本レポートでは、自分の身をもって見学した相模原市立博物館について述べていく。

※自分の特性上、障害者という目線からの見方が大半をしめることになるだろう。さらに、他の障害者の声を聞くことができたわけではないのであくまで私自身の体験にもとづくまとめになることを了承ください。

まず一つ目に、展示物や解説パネルの高さについてである。この博物館では、いたるところの展示物や解説パネルが、しっかりと子供の目線の高さに来ていることが素晴らしいと感じた。また子供には少し高いような位置にある展示物には踏み台が置かれており、子供たちはそこに登ることで大人と同じ高さで展示物を見ることができる。子供への配慮は行き届いている一方で車椅子利用者への配慮はどうだろうか？とりわけ高い位置にある展示物や解説パネルがはたして車椅子利用者が完全に観賞することができるのだろうか。椅子に座った状態で生活をしている人にとって、鑑賞しづらいのではないだろうか。パネルの高さは日本人の平均的な目線に設置することが望ましいと共通実習内で話があった。これはユニバーサルデザインの観点から考えると、すべての人のベストな高さとはいえないのではないだろうか。車椅子を利用しているのは障害者だけではない。高齢者も車椅子に乗って来館するだろう。そんな時、展示物や解説文の高さが一般的でよいのか疑問を持った。

また、他の博物館に訪れた際に見つけたサービスに「音声ガイド」と呼ばれているものがある。そこにはイヤフォンがついており、音声によるガイドを聞きながら館内を見学することができる。これにより解説パネルを見ることができない視覚障害者や、読むことに時間がかかる人、さらには他言語でのガイド設定ができる場所では外国人の来館者にも優れたサービスといえる。「音声ガイド」と聞くと文字での情報取得が困難な視覚障害者のためのサービスに思われがちだが、音声による解説というのは様々な来館者に有益なサービスなのである。そんな音声ガイド

システムがあると、より展示物のことを知ることができ、またそこから新たな興味や疑問を持って展示物と向き合うことができるのではないだろうか。

博物館内にあるプラネタリウムは、階段状に席が設置されていて、その一番下に「車椅子スペース」という場所が設けられている。それは、車椅子での階段での昇降は自身では難しいことに加えて、転落などのリスクも考えられる。そのためにドームの最前列、階段下に車椅子スペースが設けられていることは合理的であるとともに、車椅子を利用している来館者もスムーズにプラネタリウムを鑑賞することができるだろう。しかし、全ての車椅子利用者が果たしてそのスペースを望んでいるのだろうか。いくらスペースがあったとしてもすべての利用者が本当にその場所が一番心地良いかはその本人でないと分らないはずだ。スペースがあるからといって当然のようにそこに案内するのではなく、どんな人であっても鑑賞する場所の選択肢は作るべきだと私は考えた。利用者自らの選択と決定を常に大切にできたらより良いのではないだろうか。

⑥実習6日目（専門実習3日目）

市民協働の視点から、市民学芸員（博物館ボランティア）主催のクイズラリーの運営に携わった。携わった業務は、クイズラリー参加者にクイズの解答用紙を渡す受付と、参加者がスムーズに常設展示室を回れるよう案内をする係である。（図6）



図6 クイズラリー受付

【実習日誌より抜粋】

博物館でのイベントなどには今まで参加する立場でいた。今回はその反対側、運営をする側に回ることになりいろいろなことを吸収できたらなという思いでのぞんだ。

受付で紙を渡すという作業の中でいかに来館者とコミュニケーションをとるかを自分の課題として取り組むことにした。今回のクイズラリーは初級の問題と上

級の問題という二つの区分があった。私はコミュニケーションをとるためにも、そして先日考えた「お客様に選択してもらおう」ということを頭におくスタイルをとった。「簡単な問題とちょっと難しい問題とありますがどちらにしてみますか？」という問いかけをするだけでも会話が成り立つし、自分でレベルを決めることでクイズにチャレンジする意識も高まっていたように感じた。

クイズラリーという一つのイベントを通して、いろんな人と関わったというのが何よりの感想である。

⑦実習7日目（専門実習4日目）

学習資料展（11月1日～2月19日）の開催目的や学博連携の意義について説明を行った。また、学習資料展内に設置する「体験コーナー」の資料選定を行った。小学校の学習内容も踏まえ、「洗濯板」「台秤」「黒電話」「ワープロ」を体験コーナーに設置することとした。（図7、8）



図7 体験コーナーの資料選定作業



図8 体験コーナーの資料選定作業

【実習日誌より抜粋】

本日から、11月に向けての展示会の企画に入った。これはおもに博物館見学にやってくる相模原市内の小学校4年生の児童たちに向けての学習資料展であり、展示の内容はそのことを大きな要素として考えていく

必要がある。他の来館者もいつも通り訪れる。昔（昭和40年代頃）の道具にふれてもらうコーナーでは、ただ触って面白いだけではなく、その当時の生活や今との違い、当時の人々の知恵などに気づいてもらいたいというのが大きなねらいである。音や光が出て単純に目立つ道具ではなく、道具にふれて何を感じて考えてもらうことができるかを明日以降考えていくことになる。今まで昔の道具は「珍しいもの」という視点でしかふれてこなかったのだが、今回はその道具をどのように展示するかを考えながら見て回った。自分が立った視点が違うだけで道具の見方も変わった。子供に向けたものなので、凝り過ぎた結果、何も分からないようにはならないような展示を目指したい。

⑧実習8日目（専門実習5日目）

体験コーナーで設置する資料の選定と解説文案の作成を行った。

道具を一つ一つ調べ、最終的に解説パネルにまとめていくという作業を初めて行った。その中で、ただ触ってもらうだけではなく体験をしてもらう道具を厳選していった。たくさんの情報を書けばいいということでもなく、また裏づけされた確かな情報を提供しなくてはならないので普段自分がレポート作成などで踏んでいる手順と少し違っていた。特に年代についての記述は難しく、安易に「昔」と書くことも好ましくないが、はっきりと何十年前まで使われていたということではないものがほとんどで、それらの表現方法に苦勞した。また、このような解説文を作るにあたって、文献などの文字情報だけでは足りず、自分の手でふれていることの重要性や、その道具を使っていた人の生の言葉がいかにリアルで情報として大きいかを実感した。時間があればすべての道具について聞き取り調査をしたいくらいでとても惜しい。さらにブラッシュアップをして展示に近づけていけるようにしたい。

⑨実習9日目（専門実習6日目）

体験コーナーに設置する解説文（図9～13）及びキャプションの作成を行った。

【実習日誌より抜粋】

本日は前半に実際に道具にふれ直すことで、解説文のブラッシュアップにつなげることができた。前回はあくまで文献調査が主だったので、詳しい使い方や言い回しなど、保留にしている箇所があった。その部分を作るにはやはり自分の手でふれて道具を整理するこ

とがもっとも大切だと感じた。特に台秤の解説文、キャプション文は苦勞した。道具の使い方の情報量が多いので、いかに分りやすくすっきりとまとめるか、それでいてしっかりと説明ができていないかを何度も確かめていき、些細な言葉にも気を配った。普段は基本的に展示物のほうにまず目が行ってしまいがちな自分だったが、こうして解説文作りに一から携わってみるとどれだけ解説文が展示物の大切なバックアップになっているかを実感することができ、同時に当たり前のように展示物の近くにある解説パネルだが、こんなにも、きっとこれ以上に手がこまれて作成されているものなのだとということも感じ取ることができた。

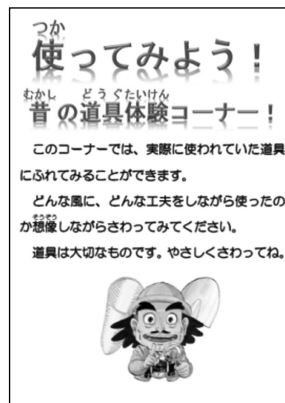


図9 体験コーナーイントロダクション

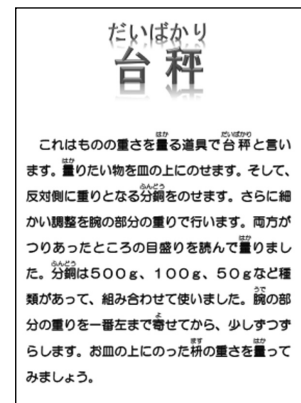


図10 台秤解説文

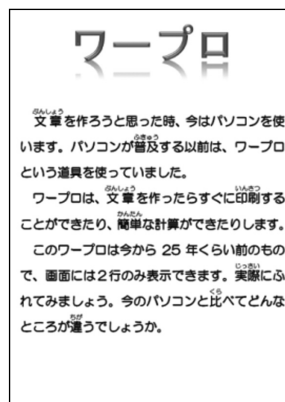


図11 ワープロ解説文

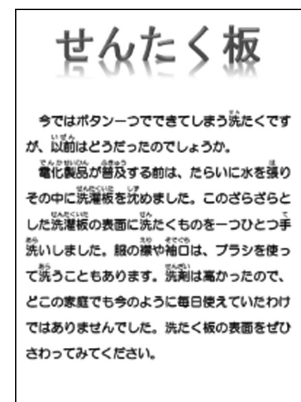


図12 洗濯板解説文

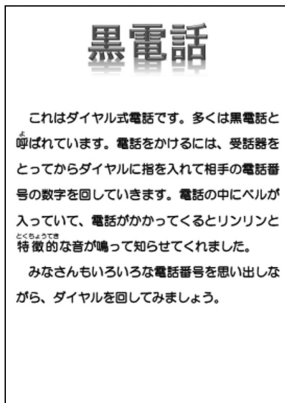


図13 黒電話解説文

⑩博物館実習レポート

博物館実習を終えてレポートの作成を行った。

この度の博物館実習は一言で、「とにかく実りが多かった」実習だった。それには二つ理由がある。

一つ目は、単純に、様々なことをやらせてもらえたということだ。前半の共通実習ではとにかく身をもって体験、経験させてもらえたことが多かった。実習の授業で習ったことの復習は巻物の扱いと梱包のみで、解説パネル作りや植物の標本作りなどまさに実習といった感じで自分の手を動かす作業の多さに感動した。また、別の授業の中で、学内の対象物で展示解説を学ぶことがあったが、この実習では実際に博物館にあるものを使っての展示解説にも取り組むことができた。それも他の実習生やお客様が見学をしている中で話す機会をいただき、二重に現実的な展示解説だった。授業では主に、対象物について調べてまとめて話すということを重点的に習っていたが、実習中ではそこからさらに踏み込んだ話術面についてご指導いただくことができ、人を相手にするということの難しさや工夫すべき点を一緒に過ごした実習生の数だけ教えていただくことができた。どれだけ資料の知識があったとしても、それを届ける話術がなければならないこと、むしろ知識があるだけでは展示解説とは言えず、お客さんとどれだけコミュニケーションができるか、そのスキルの重要性を実感することができた。

「実りが多かった」二つ目の理由は、障害を持った私を受け入れ、私の力を発揮することができる分野を提供していただけたことだ。それだけではない。今回、後半の分野別実習では博物館の施設についてと並び、ハンズオン展示について考え企画をさせていただいた。それは結果としてハンズオン（手でふれること）を越えた展示になったのだ。具体的には、単純に展示

物に触れるだけでなくその展示物を使ってみる、動かしてみるということまで掘り下げて考えることができたのだ。取り上げたのが昔の道具というテーマだったこともあるが、当初はハンズオン展示で動いていたものを「体験展示」にすることに関われたこと、それは本当に他では出来ない経験なのではないかと思う。そもそも見ることを前提としている博物館の資料を数多く手でふれさせてもらえたことからしてとても実りがあった。

6. 終わりに

博物館の施設面の課題と学習資料展の体験コーナーの作成を本実習生が追究する課題として実施したことにより、当館をあらためて見つめ直すことができた。職員では気づきにくい点だけでなく、健常者である博物館ボランティアから募った意見とは異なった視点から多くの情報を得ることができた。本実習生が感じた課題は、実現に向け動き出せるものもあれば、予算面の問題から数年かけて取り組まなければならない問題まで様々であったが、新しい視点で当館を見つめなおすことができたことは有益であった。特に印象的だった言葉は、本実習生が発した「利用者による選択と決定」である。様々な選択肢を準備し、お客様に決めていただくことの重要性に気付くことができた。

他方、これまでの体験コーナーは、珍しいものに触ることができるという意味合いが強かった。本実習では、それだけでなく、学習という要素を強く出す事を課題として設定した。たくさんある博物館資料の中から、前述の4つの道具を選び、設置したことは利用者の学習を強く意識した結果だと言える。どの道具も当時の使用条件とは異なるが、「操作できること」、「現在も使用されている道具であること」を大切な判断基準とした。実際の展示（図14）の通り、体験コーナーの道具の横に解説文を添えることによって、多くの来館者に道具を体験していただき学習してもらえるよう配慮した。今後も改善の必要を感じているが、学校団体が来館すると、本企画展内で最も来館者が足を止めるコーナーの一つとなったのは大きな成果だと言える。（図15）

本実習生が言う「全ての人に快適な博物館」というのは、非常に壮大な課題かもしれない。しかし、機を捉え課題を把握しその都度改善していくことで、そのような博物館に近づいていけるのではないだろうか。



図14 学習資料展に設置した体験コーナー



図15 体験コーナーで学習する利用者